

A. Lemonnier の描いた‘ジョフラン夫人邸の夜会’

百 田 み ち 子*

Une Soirée chez Madame Geoffrin, peint par A. Lemonnier

MOMOTA Michiko

はじめに

18世紀のジョフラン夫人のサロンの様子を伝えるアニセ・シャルル・ガブリエル・ルモニエ作の絵画を一度考察しておく必要がある。このあまりにも有名な絵画は、多くの人々からアナクロニズムと嘘に満ちていると評されつつ、相変わらず、十八世紀を代表するサロンの集会を示すのに用いられている。筆者も1978年出版のサロン史にこの写真を挿入している。この絵によって当時のサロンの様子が一目で分かる。むしろ歪曲された実像をなおざりにするのも気がかりではあったが、これを正確にする手立てがなかなか見つからなかった。小説と同様、絵画とは必ずしも事実を正確に描写するものではないという考えから、ジョフラン夫人のサロンをテーマとした絵という位置づけに甘んじてきた。その後、1991年になってからやっとこの絵画の信憑性の度合いを調べる本格的な論文がでた。この仕事に着手したのはイギリス人の John Lough である。否定的な結論だったにもかかわらず、この絵画は最近では1999年のサロン研究の国際学会誌の表紙に堂々と登場してきている。

John Lough の論文の目的はジョフラン夫人のサロンの実像に限りなく接近することであった。第一次資料とも呼ぶべき文献を駆使して、いわば第二次資料であるこの絵画の中の主題とモデルを

検証するという方法を用いることによって。第一次資料が完全に信頼するに足るという証拠がない以上、時に虚しさも伴う仕事であろうが、根気強さを持ってなされたこの検証に、さすがシャーロックホームズの国の研究者だと脱帽したのも否めない。

十八世紀フランスの文芸サロンの規模と様子を示すのによく使われるこの絵画の信憑性の検証はサロン研究上、必要欠くべからざる、かつ、避けては通れない論文なので、ここで紹介を兼ねつつ、ジョフラン夫人研究の資料固めに加えておきたい。

1. 第一次資料

I. 夫人の同時代人の証言

- 1) Marmontel; *Mémoires*, 1804 (1745年から1749年のあいだに夫人と知り合い、1767年まで夫人宅に寄宿)
- 2) L'abbé Morellet, André; *Eloges de Mme Geoffrin, suivis de lettres et d'un Essai sur la conversation par l'abbé Morellet*, Paris, Nicole, 1812
- 3) L'abbé Morellet, André; *Mémoires sur le dix-huitième siècle et sur la Révolution*, 2 vols, Paris, Ladvoat, 1821
- 4) Marquis de Ségur, Pierre; *Le Royaume de la rue Saint-Honoré: Madame Geoffrin*

* 人間環境学部 環境文化学科 助教授
2006年3月30日受付

et sa fille, Paris, Calmann-Levy, 1897

II. Jacqueline Hellegouarc'h 編著 *L'Esprit de société* (Garnier, 2000) による伝記に沿った資料 (上記 I の資料の検討・是正がなされている)

Le témoignage de Marmontel

Témoignage d'un autre habitué: l'abbé Morellet

Souvenir d'une femme: Mme Vigée-le Brun
Témoignages ponctuels, Impressions de Horace Walpole en 1765-1766

1766: l'apogée: Voyage triomphal en Pologne et en Autriche, lettre du roi Stanislas Poniatowski, dépêches des Mémoires secrets de Bachaumont (1766)

Éloges funèbres par Thomas, Morellet et d'Alembert (1777) et encore en 1812 par l'abbé Delille

III. その他 (代表的関連資料)

F.M. Grimm et al., *Correspondance littéraire, philosophique et critique*, Paris, Garnier, 1877-1882

2. 絵画の信憑性

Anicet Charles Gabriel Lemonnier; *Première lecture chez madame Geoffrin, de L'Orphelin de la Chine, tragédie de Voltaire, en 1755* {略称 *Une soirée chez madame Geoffrin en 1755*} (アニセ・シャルル・ガブリエル・ルモニエ作『1755年のジョフラン夫人邸でのヴォルテールの悲劇, 中国の孤児の朗読会』)

画家Anicet Charles Gabriel Lemonnier (1743-1824) は Vien の弟子, ローマ賞受賞 (1772), アカデミーフランセーズ会員 (1789) で, この絵画はメセナをテーマとする三部作 (フランソワ 1 世, ルイ 14 世, ジョフラン夫人) のひとつとしてナポレオンの皇后ジョゼフィーヌから画家ルモニエがマルメゾンの画廊のために制作を依頼され, 1812 年のサロンで披露された。オリジナルはマルメゾンにある。これより小さめの複製が存在し, ルモ

ニエの義理の娘によって1871年にルーアンの科学文学芸術アカデミーで紹介され, ついで1942年, ルーアン美術館に寄託された。

この絵画についてセギュール侯は次のように述べている。

Cette composition, en effet, exécutée quarante ans après la mort de Madame Geoffrin, ne saurait offrir aucun intérêt historique; et la fantaisie de l'artiste y a groupé autour de la figure principale des personnages qui n'ont jamais pu se rencontrer dans le salon de la rue Saint-Honoré, comme Fontenelle, mort en 1757, et mademoiselle de Lespinasse qui y fit sa première apparition en 1764.

(Marquis de Ségur; *Le Royaume de la rue Saint-Honoré: Madame Geoffrin et sa fille*, Paris, Calmann-Levy, 1897, p.496)

「この絵は実のところジョフラン夫人の死後40年たってから描かれたもので, いかなる歴史的興味をも呈さず, 画家の空想によって, とうていサン・トノレ街のサロンで出会うことなどありえない人々が中心人物の廻りに集められている。たとえば, フォントネルは1757に死亡, レスピナス嬢は1764年になってからここに出入りしはじめたのであるから。」(セギュール侯著『サントノレ街の王国, ジョフラン夫人とその娘, 』, 1897)

1821年画家の生存中, Philibert Louis Debucourt が以下の55人の名前をリストアップし, この油絵のいわばモデル当て『鍵』付きの版画を出版した。これが登場人物が判明する糸口である。次頁の写真参照。

番号は左下1のビュフォンから右へと進む。2のレスピナス嬢の髪型と衣装, 15の退屈そうなジョフラン夫人, 5のグランペールは病気, 16のフォントネルは居眠り, 39のラモーは40のルソーと音楽の話, 51のドーバントンに話かけている1のビュフォンは少し粗野で居丈高な感じ, さえない感じで描かれている38のエノー高等法院長は代理出席者を立てたようにしかおもえない。『鍵』な

Anicet LEMONNIER: *In the salon of Madame Geoffrin in 1755*

1812

Château de Malmaison

<http://www.wga.hu/html/l/lemonnier/index.html>

- | | | | |
|-------------------------|-------------------------------|----------------------|----------------------------------|
| 1. Buffon | 2. Mlle de Lespinasse | 3. Mlle Clairon | 4. Le Kain |
| 5. D'Alembert | 6. Carle Vanloo | 7. Helvétius | 8. Duclos |
| 9. Piron | 10. Crébillon | 11. Bernis | 12. Duc de Nivernois |
| 13. Duchesse d'Enville | 14. Prince de Conti | 15. Mme Geoffrin | 16. Fontenelle |
| 17. Joseph Vernet | 18. Comtesse d'Houdetot | 19. Montesquieu | 20. Clairaut |
| 21. D'Aguesseau | 22. Dortous de Mairan | 23. Maupertuis | 24. M ^{AL} de Richelieu |
| 25. Malesherbes | 26. Turgot | 27. Diderot | 28. Quesnay |
| 29. Abbé Barthélemy | 30. C ^{TE} de Caylus | 31. D'Enville | 32. Soufflot |
| 33. Bouchardon | 34. Saint-Lambert | 35. D'Argental | 36. BUSTE de VOLTAIRE |
| 37. Choiseul | 38. Président Hénault | 39. Rameau | 40. Rousseau |
| 41. Raynal | 42. La Condamine | 43. Thomas | 44. Vien |
| 45. Marmontel | 46. Marivaux | 47. Gresset | 48. Vaucanson |
| 49. Pigale | 50. Jussieu | 51. Daubenton | 52. Abbé de Condillac |
| 53. Madame de Graffigny | 54. Réaumur | 55. Madame de Bocage | |

(人物名・指示線筆者)

しでも、画家の技量で、ひとまず、これだけは、
いやあるいはもう少し著名人が判別できるだろう。

3. Lough 氏による検証

次に、イギリス人の John Lough の論文を読んでいく。John Lough: *Lemonnier's Painting, 'UNE SOIRÉE CHEZ MADAME GEOFFRIN EN 1775'*, in *French Studies*, vol 45(3), July 1991, pp.268-278

まず、描かれているサロンの規模が大きすぎはしないか？ヴォルテール作五幕悲劇『中国の孤児』の最初の朗読会に54人も的人数が会し、座っている人、立っている人がいるなかで、作品の批評を行ったとは信じがたく、忠実な18世紀サロンの紹介ではなく、このタブローは空想か嘘に満ちているのではないかと疑念が生じる。そこで、同時代人の資料を用いて、この絵の人物を一人一人調べていくことになる。(第二資料の検証を第一次資料で行うという手続きである。マルモンテルの『回想録』に不確かな点があることは指摘されていることであり、一次資料にあげたとはいえ、情報の正確さが完全なものであるとは断定しがたいが、ひとまず、この方法で、ジョフランラン夫人のサロンの実像に迫ってみてまず明確になったことは、画家の目的が18世紀サロンの忠実な紹介ではなかったということ、ついで、50人規模のサロンは異例であるということである。)

次に、サロンの女主人とこの53人の客についてのべると参会客の多様性がこのサロンの特徴だといえる。夫人は水曜日に夕食会もしくは晚餐会を1740年ごろから開いていた(1771年の書簡でもう30年来を夕食会を催してきたといっていることから推測、上の資料I-4 Ségur)。月曜日には、芸術家、美術鑑定家、パトロン予備軍が主で、時にマルモンテルのような文人も2、3人来ていた。これに加えてほかの日も晚餐会を開き、貴族ならば男女とも、および、パリ駐在外交官や外国人旅行者を招いていた。Morelletによれば、週のうち、感じのよい女性たちをごく少人数であるが晚餐会に招いていたそうである(上の資料I-2)。ほとんど外出しないジョフラン夫人はたくさんの

社交界人や最上の客を夜会に招待していた。

そこで、劇の朗読があるとすれば、その日は水曜日の夕食会の後だと考えられるが、この人数分の食事の用意はまず無理である。1770年のヴォルテールの胸像の申し込み開始の提案が、ネッケル夫人のサロンで文人招待の夕食会と同じ日に行われたとき、17人の申し込みがあったと、Grimmは伝えている。またMorelletによれば、ドルバック家の日曜、木曜の夕食に集まっているのは、10人、12人から15人及び20人の文人、社交界人、外国人である。したがってタブローに描かれた人数は誇張されていると考えられる。

また、ヴォルテールは胸像とはいえ、あたかも司会者のごとく朗読会を主宰している。Ségurは「ヴォルテールはジョフラン夫人と親密に過ごす時間など持たなかった(ヴォルテールの手紙にジョフラン夫人が最初にあらわれたのは、1750年で、1760年代に彼女へ4通、ポーランドにいた彼女からの1通あるのみ)」と付け加えていることから、1750年から夫人の死の1777年までの間のヴォルテールが夫人のサロンに来たとは考えがたい。もっとも彼は1750年のベルリン出発前は、パリをよく留守にしていたとはいえ。そこで、いささかコミックな感じがするが、画家ルモニエは胸像による登場というすばらしいアイデアを思いついたのではないか。また、Ségurによれば、夫人が買い集めた美術品は芸術家擁護を兼ねていたため、もちろん、当時の絵画が多いが、夫人所蔵の彫刻は二つのラシーヌの大理石胸像のみである。ヴォルテールの胸像はない。したがって、36の胸像は疑わしい。

Marmontelは女性ではレスピナス嬢のみがジョフラン夫人の夕食会に招かれたと書いている。したがって、3のクレーロン嬢、13のアンヴィル公爵婦人、18のウッドト伯爵夫人、53のグラフィニー夫人、55のボカージュ夫人は取り除かなくてはいけない。また、Ségurはレスピナス嬢が、グランベールの取り持ちで夫人に近づけたのはずっと後の1764年だと書いていることから、彼女も画家の想像である。したがって、2、3、13、18、53、

55は不在のモデル。

画家たちが招かれる月曜日と文人達の集まる文学的水曜日は完全に一線を画しているので、画家たちの、6のヴァン・ロー、17のジョジョエフ・ヴェルネ、32のスフロ、33のブシャルドン、44のヴィエン、49のピガール、それに39の音楽家ラモーも消えてゆく。

数学、科学・技術に携わる人々は文学に興味があっても文学サロンには招かれない。そこで、20のクレロ、31のダンヴィル、42のラ・コンダミヌ、48のヴォーカンソン、50のベルナル・ド・ジュシュー、51のドーヴァントンも取り除かれる。もともと科学者だが1745年、アカデミー・フランセーズ会員に選ばれた23のモーペルチュイは別に考えるべきだが、1755年はベルリンにいたので、こちらも消えてゆく。

1のビュッフォンはパリの文学サークルから遠ざかっており、ジョフラン夫人の水曜日に出席したという同時代人の証言はない。数十年あとで、レスピナス嬢がこの偉大な人物に会いたいといったとき、夫人がこの願いをかなえてくれて、水曜の夕食会に来たと Morellet は書き残しているのみ。

ルイ・フランソワ・ドゥ・ブルボン、コンチ公は文学に興味はなく、Marmontel も Morellet もジョフラン夫人のサロンで彼と一度もあつてはいない。そこで14のコンチ公も消す。

24のリシュリュー元帥はアカデミー・フランセーズの会員だが、水曜会の入会をいつも断っていた。これも消える。

37のシュワズール公は以前 Comte de Stainville スタンヴィル伯と呼ばれていた。1754年から1757年まで、ローマ大使でフランスを留守にしていた。Séguir によれば、夫人との間に取り交わされた公式文書に親密さを示すものはなにもない。これも削除。

版画家でもある30のケーリュス伯は月曜日の夕食会でイニシャティヴをとっていて、ここにはいないはずである。

1743年にアカデミー・フランセーズの会員に

なっている12のニヴェルネ公と19のモンテスキュー男爵は水曜会に出席。だが後者は、1754年の12月にラ・ブレードの彼の城からパリにもどるやいなや病に倒れ、2月に死亡。かつ、ガスコ師 (Abbé Guasco) への書簡によれば、1月にジョフラン夫人が彼を訪問したとき絶交した、とあるから1755年の出席は微妙。

34の小貴族サン・ランベール侯は1755年ごろパリとリュネーヴィルとの間をスタニスラス王のボディエーガードとして行き来していた。まだ29歳で作家としての評判もそこそこではあったがジョフラン夫人の水曜会には出席していたと考えられる。

21の法服貴族ダゲッソーは1751年に死亡なので、ここから消える。

38のエノー高等法院長は1723年にアカデミー入りをしており、疑いもなく文人の夜会の客。26のチュルゴも水曜会の客だが、1755年は明らかでない。

水曜会出席が資料的に第一に確実なのは「メルキュール」の編集に携わっていた45の Marmontel マルモンテルで、彼は月曜会にも来ていた。25のマレルヴは当時よく知られている人物ということだけでタブローに描かれたとおもわれる。

もう一人の法服貴族35のダルジャンタルは演劇好きでコメディエール・フランセーズにヴォルテール劇を見に行ったが、Morellet も Marmontel も彼をジョフラン夫人のサロンの参会客とはいっていない。

40のルソーは『告白録』や書簡のどこにもジョフラン夫人のサロンに足を踏み入れたとは書いていない。27のディドロはジョフラン夫人とはほかの人の家で会っており、ジョフラン夫人の水曜日のサロンには来ていない。ホレス・ウォルポールとデュ・デファン夫人のサロンで会っていた29のバルテルミー師がジョフラン夫人の水曜会に出席したという証拠はなにもない。これも消える。8のデュクロはジョフラン夫人から手紙をもらい、Marmontel によく現れる人物だが、夫人の客であったことは何もほのめかされていない。これも削除。28のドクター・ケネーについてもデュクロ

と同じことがいえる。これも消える。

52のコンディヤックはタンサン夫人やレスピナス嬢の常連ではあったが、ジョフラン夫人との交際はMarmontelに記されていない。これも消える。47のグレッセは1748年にアカデミー入りを果たしており、1754年にグランペールをアカデミーに迎えられているが、このことは、一切Marmontelに記されていない。削除。

43のThomasはジョフラン夫人の大ファンでこの絵に描かれていて何の疑問もわからない人物だが、彼がアカデミーに認められたのは1759年になってからであり、1755年には弱冠23歳で、ボーヴェのコレージュで教鞭をとっていた。水曜の客とは考えにくい。これも消去。

(なお、Loughはこの論文で、54のRéaumur(1683-1757)には言及していない。彼の代表作は『昆虫の歴史に奉仕するための覚え書き』で、25歳でアカデミー・デ・シヤンス入りを果たしている。私見だが、水曜会は場違いと思われる。)

以上をまとめてみる。

○はこの水曜日の夜会の出席が確実、△は出席が微妙、無印は不在のモデル

1. Buffon: ジョフラン夫人の水曜日に出席したという同時代人の証言はない
2. Mlle de Lespinasse: 夫人と親しくなれたのは、ずっと後の1764年
3. Mlle Clairon: 女性は夫人の夕食会に招待されない
4. Le Kain: ジョフラン夫人のメセナに俳優が出席したという記録はひとつもない
5. D'Alembert: ○コンドルセ侯へのジョフラン夫人についての手紙による
6. Carle Vanloo: 芸術家がくるのは水曜日でなく月曜日である
7. Helvétius: ○MarmontelとMorelletによる
8. Duclos: Marmontelによく現れる人物だが、夫人の客であったことは何もほのめかされていない

9. Piron: ○Ségurによる
10. Crébillon: ○Ségurによる
11. Bernis: ○夫人の娘のラ・フェルテ・アンボー夫人の生涯の友。Ségurによる
12. Duc de Nivernois: ○水曜会に出席
13. Duchesse d'Enville: 女性は夫人の夕食会に招待されない
14. Prince de Conti: コンチ公は文学に興味はなく、マルモンテルもモレレもジョフラン夫人のサロンで彼と一度もあってはいない
15. Mme Geoffrin: ○
16. Fontenelle: ○ジョフラン夫人のサロン開始時の重要人物。Ségurによる
17. Joseph Vernet: 芸術家がくるのは水曜日でなく月曜日である
18. Comtesse d'Houdetot: 女性は夫人の夕食会に招待されない
19. Montesquieu: △水曜会には出席だが、この1755年の出席は少し考えにくい
20. Clairaut: 数学、科学・技術に携わる人々は文学サロンには招かれない
21. D'Aguesseau: すでに、1751年に死亡している
22. Dortous de Mairan: ○ジョフラン夫人のサロン開始時の常連。Marmontelによる
23. Maupertuis: 1755年はベルリンにいた
24. M^{AL} de Richelieu: アカデミー・フランセーズの会員だが、水曜会の入会をいつも断っていた
25. Malesherbes: 当時よく知られている人物ということだけでタブローに描かれたとおもわれる
26. Turgot: △水曜会の客だが、1755年は明らかでない
27. Diderot: ジョフラン夫人の水曜日のサロンにはきていない
28. Quesnay: Marmontelによく現れる人物だが、夫人の客であったことは何もほのめかされていない
29. Abbé Barthélemy: ジョフラン夫人の水曜会

に出席したという証はなにもない

30. C^{TE} de Caylus : 月曜日の夕食会でイニシャティヴをとっていて、ここにはいないはずである
31. D'Enville : 数学, 科学・技術に携わる人々は文学サロンには招かれない
32. Soufflot : 芸術家がくるのは水曜日でなく月曜日である
33. Bouchardon : 芸術家がくるのは水曜日でなく月曜日である
34. Saint-Lambert : ○ジョフラン夫人の水曜会には出席していたと考えられる
35. D'Argental : Morellet も Marmontel も彼をジョフラン夫人のサロンの参会客とはしていない
36. BUSTE de VOLTAIRE : 場違い, 夫人はラシーヌの胸像は蔵していたが, 1770年頃はヴォテールの胸像を予約注文するのは拒否している
37. Choiseul : 夫人と親密ではない。1754年から1757年まで, ローマ大使としてフランスを留守にしていた。
38. Président Hénault : ○1723年にアカデミー入りをしており, 疑いもなく文人の夜会の客
39. Rameau : 芸術家がくるのは水曜日でなく月曜日である
40. Rousseau : ジョフラン夫人のサロンに足を踏み入れた証拠がない。
41. Raynal : ○Marmontel による
42. La Condamine : 数学, 科学・技術に携わる人々は文学サロンには招かれない
43. Thomas : 弱冠23歳で, ボーヴェのコレージュで教鞭をとっていた。水曜の客とは考えにくい。
44. Vien : 芸術家がくるのは水曜日でなく月曜日である
45. Marmontel : ○水曜会出席が資料的にもっとも確実な客
46. Marivaux : ○Marmontel による
47. Gresset : 1754年にグランベールをアカデミーに迎えいれているが, このことは, 一切

Marmontel に記されていない

48. Vaucanson : 数学, 科学・技術に携わる人々は文学サロンには招かれない
49. Pigale : 芸術家がくるのは水曜日でなく月曜日である
50. Jussieu : 数学, 科学・技術に携わる人々は文学サロンには招かれない
51. Daubenton : 数学, 科学・技術に携わる人々は文学サロンには招かれない
52. Abbé de Condillac : ジョフラン夫人との交際は Marmontel に記されていない
53. Madame de Graffigny : 女性は夫人の夕食会に招待されない
54. Réaumur : 言及なし (私見によれば不在のモデル)
55. Madame de Bocage : 女性は夫人の夕食会に招待されない

まとめ。1755年の水曜会に来ていたと考えられる人物○△は以下の15人。但し, 同じ日に一同が会することが出来たかどうかは不明。5, 7, 9, 10, 11, 12, 16, 19, 22, 26, 34, 38, 41, 45, 46の, グランベール, エルベシウス, ピロン, クレピヨン, ベルニ, ニヴェルネ公, フォントネル, モンテスキュー, ドルトワ・ドゥ・メラン, テュルゴ, サン＝ランベール, エノー, レナール, マルモンテル, マリヴォー。

反対に, 常連だったのもかわらず, 省かれた人物がいる。ニックネームで呼ばれた詩人Gentil-Bernard, 夫人のサロンの早期からのメンバーで夫人の死後も邸宅に寄宿した碩学の Levesque de Burigny (Morellet による), 水曜会のメンバーだった作家 Voisenon 師 (Morellet による) も, また, 病が癒えるまで夫人宅に滞在した劇作家 Saurin (Ségur による) などは, なぜかこのタブローに描かれていない。

また回想録作家の Morellet モレレがこの絵にいないのは, ジョフラン夫人との知己をえたのがローマから帰国後の1759年であったためである。彼は『ジョフラン夫人の肖像』‘Portrait de

Madame Geoffrin' を1777年に出版し、その再版を出したのが、1812年、この絵画の披露がなされた年であった。これは偶然ではないとおもわれる。

おわりに

以上が Lough 氏の検証結果である。一般的なサロンの規模や参会客の人数が20人以内だということが推察できる。客数が誇張されたこの絵画は異文化としてのサロン紹介にはあまりふさわしくない。

また、ジョフラン夫人と百科全書派とのかかわりの研究の一環として、このタブローの調査をすれば、いささか肩透かしをくってしまう。1812年は第一帝政期であって啓蒙の世紀ではない。18世紀に活躍した絵画の登場人物にもかかわらず、絵を依頼したのがナポレオンの皇后ジョゼフィーヌであるから、この絵の意味するものは、才人たちを集めるサロンの力の誇示、さながらコメディー・フランセーズの俳優たちの勢ぞろいのような18世紀サロンの劇的提示にとどまらず、大砲によるのではなく天才たちによるフランスのヨーロッパ制覇であると難なく考えられる。不在なのに描かれ、常連だったのに省かれた人物がいるのもそのためである。